



この記事は、上掲写真で示したガリ版刷りの薄い2部の冊子を要約したものである。  
表紙タイトルは、芝山勉君遭難経過報告1、2となっている。1は7ページ、2は10ページである。  
背表紙には、ともに次のように記載されている。

西京大学遭難対策本部  
昭和32年4月10日発行  
京都市左京区下鴨半木町 西京大学農学部  
応用昆虫教室内 遭難対策本部  
Tel. (78) 1151 学内 69

1 ページ目は目次であり、それぞれ次のようになっている。

#### 1の目次

1. 31 年度春山合宿行動概要
2. 事故発生から打ち切りまでの経過
3. 捜索隊支出金額
4. 概念図

#### 2の目次

1. 第2次捜索隊報告
2. 第3次捜索隊報告
3. 第4次捜索隊報告
4. 第5次捜索隊報告
5. 会計報告

1及び2の内容を私見による注釈を加えながら要約することとする。・以下は私による注釈である。

## 「31年度春山合宿行動概要」

目的 雪洞訓練及び剣岳登頂

Member 松村一郎(C.L) 芝山努(S.L) 稲富洋 高田直樹 城戸久隆 竹村義弘 尾鍋一郎(OB) 藤井俊(OB) 小川真司(OB) 武居三郎(OB)

・尾鍋、藤井の両先輩は、二人で剣から槍までの北アルプスの積雪期縦走を行う計画をかなり以前から温めていた。この長大な縦走での最初の難関は、弥陀ヶ原であった。ここを荷揚げサポートしようというのが、この計画の主目的であった。遭難が発生しなければ、一の越あるいは竜王付近まで縦走の先輩を送って下山する予定だったと私は思う。

### 1. 春山合宿行動概要

行動概要は次のようになっている。

3月15日 夜、京都発

16日(快晴)電車は本宮まで。千寿ヶ原まで7時間半かかって16:30着。ケーブル乗り場にて泊。

17日(雨のち雪)美女平のケーブル駅まで2往復で荷揚げ。ケーブル駅に泊。

18日(晴)滝見小屋上部に一番目の雪洞を設営。3時間を要する。

19日(晴後曇・ガス)弥陀ヶ原ホテル14:26 小松坂取り付き付近に2番目の雪洞設営。この日、竹村下山し、小川合流。

・トランシーバーはなく、携帯もない時代に、下山したり合流したりと簡単にやっているのは、驚きである。

20日～22日の3日間、吹雪のために停滞。

・エアマットはなく、雪洞の雪の上に並べたスキーの上にベニヤ板を置き、カボックマットという薄いフェルトのマットを敷いただけの寝床は、ひどく寒かったのを思い出す。

23日(薄曇)弥陀ヶ原ホテルに縦走用の荷を残し、国見岳北面の下部に3番目の雪洞を掘る。

24日(曇・ガス、西の風強し)停滞。雪洞の入り口が埋められるため、頻繁に除雪を行う。

25日(午前風なく午後吹雪)11:30雪洞を出て、15:30雷鳥平に達する。雷鳥沢を前方に望む浄土川左岸に4番目の雪洞を掘り、ここをベースとする。

26日(吹雪)停滞。

27日(晴)弥陀ヶ原ホテルに残置した縦走用食料の荷揚げ。小川 OB 下山。

### 2. 事故発生から打ち切りまでの経過(この項完全引用)

28日 尾鍋、芝山は剣登頂の目的で別山乗越小屋に至るも天候急変のためここに泊。雷鳥沢ベースには、藤井、松村、稲富、高田、城戸の5名が残留。

29日(快晴)尾鍋、芝山は6:05乗越小屋発、剣岳に向かい10:55登頂。下降にかかり、平蔵コル着11:50。「更に下山の途中午後13時頃、前剣の下りに於いて芝山スリップを起し東大谷に転落する。」

(1)事故発生当時現場付近に居合わせた人員

イ. 西京大学山岳部 OB 尾鍋一郎

ロ. 京大パーティ 脇坂以下5名。

ハ. 泉州山岳会員 永瀬幸一

ニ. 慈恵医大パーティ 3名(氏名不詳)

(2)事故発生直後、京大 OB 脇坂氏は永瀬幸一氏に事故発生を雷鳥小屋に連絡して貰うよう依頼、長瀬氏は直ちに連絡に下山。

(3)現場に居合わせた者にて午後6時頃まで捜索を行う。当夜剣山荘に泊まる。

(4) 捜索状況は次の通りである。

直ちに尾鍋は転落点に駆けつけるには危険があるので、ひとまずそのリッジの肩に下降し、休憩中の京大パーティも直ちにアンザイレンして肩より下方のコルへ到着。そこより脇坂、新美は転落点へ登った。その時丁度慈恵医大の3名が居合わせた為、尾鍋を入れて6名で転落点へ引き返し、脇坂氏がジッヘルして尾鍋が30m下方へアップザイレンした。30mのところにはマフラー、手帳、ピッケル、キスリング(肩ヒモは切れていない)が残っていた。それより20m位の急斜面のルンゼがあり、それ以上下降できなかった。

尾鍋は雷鳥ベースの残留者への連絡を慈恵医大パーティに依頼。尾鍋、京大パーティはもとの転落点にもどり、今度はリッジの肩に下り、そこより140m のザイルを使って、尾鍋、脇坂は中俣の支沢を下り、芝山の転落した沢との交差点よりその沢を前述のルンゼの下まで登って捜索したが、ポップスレーの跡のように雪上に転落跡が残り、所々に血痕があり、交差点より更に下方へとシュプールが続き、交差点よりやや下方に手袋、上方にくださったテルモスを発見した。両名は更に下ったが滝があり、日も暮れ始め、それ以上捜索できず、その日は打ち切った。

(5) 別に部員激励のため午後午後4:30頃、雷鳥小屋に到着した OB 武居は午後6:00長瀬氏の連絡を受け直ちに残留していた部員を小屋に移し残留部員の指揮を執る。

(6) 同夜武居らは、偶々雷鳥小屋に居合わせたガイド佐伯文蔵と捜索のための食料について、及び状況の確認、下方との連絡について協議し、翌朝下山予定の佐伯福夫に本件について警察並びに留守本部への連絡を依頼する。

・私の知見を付け加える。京大パーティは、OB で京大農学部助手の脇坂氏が6名の新人部員を連れて入山していた。脇坂氏が地元出身で各小屋の主と知己の間柄であったため、乗越小屋や剣山荘などの鍵を借りてきていたので、これらの小屋が使用できた。この時期に開いている小屋は当時雷鳥平にあった雷鳥小屋のみであった。

30日(日中快晴、夕刻よりガス発生、尾根は強風)

(1) 午前5:15、藤井、松村、稲富、高田の4名は食糧輸送並びに捜索参加のため雷鳥小屋を出発し、午前9:50剣山荘に着き、尾鍋及び脇坂以下の京大パーティと合流する。

(2) 上記の内、尾鍋、松村、高田は居合わせた岡山大学パーティよりザイル一本を借り現場に向かうも状況悪く捜索不能なため剣山荘に引き返す。

(3) 藤井、稲富は帰洛予定であった京大パーティとともに下方との連絡のため午後1時、剣山荘を出発し、午後3時雷鳥小屋に至り、武居、城戸と合流し上部の状況を伝える。

(4) 京大パーティは更に下山し、当夜弥陀ヶ原観光ホテルに泊まり、脇坂は詳細に状況を発送する。

(5) 同夜、稲富、城戸は室堂に宿泊中の岡山大パーティーより更に1本のザイルを借用して来る。

・当時のこの時期に弥陀ヶ原観光ホテルが営業していたとは考えられないが、雪上車による移動は可能であり、人は入っていたと思われる。

ザイルは当時麻ザイルしかなかったが、かなり高価で貴重なものであった。

遭難事故発生日(29日)以後悪天が続き、捜索はほとんど行われなかった。

遭難発生の翌日、尾鍋 OB、松村 CL と私の3人が、一服剣を越え前剣のコルに達して、前剣沢の下降を試みたが、日本海より強烈に吹き上げる西風のため、下降は無理であった。これが、現場近くに達した最後の行動であった。

この時の経験が、後に別山尾根より下降しての G1 登攀を思いつくきっかけとなったと思う。

29日の遭難の報がもたらされた直後より、一度下山していた小川 OB、竹村、芝山次兄の3名、山岳部顧問小松教授、芝山長兄、森本 OB、角倉、芝山友人の長谷川(京大)、鎌田(立命)の6名などが、相次い

で京都を発った。佐伯文蔵以下7名の芦峠ガイドも現場に向かった。

しかし悪天候が続き、現場では、数時間の吹雪の合間を見ての行動のみが許される状況であった。4月2日、小川 OB、武居 OB、脇坂氏と芦峠ガイドは、雷鳥小屋にて協議し、捜索打ち切りを決定した。(以下省略)

・29日の遭難事故発生以後、私の名が現れるのは、劔山荘に向かう30日の記録と4月4日に劔山荘を出て下山するという部分のみである。29日からの一週間劔山荘に滞在したことになる。すぐそばには血染めの芝ヤンのザックがあり、まったくの一人きりになることはなかったが、孤独で恐ろしい夜もあったことを想い出す。

芝山努君遭難経過報告2は、メンバーと日程及び行動の概略のみを書くにとどめる。

#### 1. 第2次捜索隊報告

Member 小山貢(C.L) 安養寺英雄 塚本珪一 武居三郎 藤井俊(以上各 OB)

日程 5月1日～5日

雷鳥小屋をベースに、別山乗越より立山川を下り、アプローチの偵察を行う。次に東大谷出合を経て、前劔沢を登行しようとするも落石の危険多く退却し、上の二股まで下り、右俣をつめて別山尾根より乗越を経て小屋に帰る。

#### 2. 第3次捜索隊報告

Member 尾鍋一郎 OB(CL) 藤井俊 OB 松村一郎(SL) 竹村義弘 稲富洋 高田直樹

日程 5月10日～5月16日

五右衛門谷上部にて、氷雪技術の訓練を行う。14日、尾鍋、松村、高田は立山川を下り、東大谷出合を経て、前劔沢をつめようとするも、中の右俣・中の左俣出合まで来たとき、天候急変し、やむなく往路を引き返す。

この時の積雪により、遺体発見は困難と見て捜索を止め、下山。

#### 3. 第4次捜索隊報告

Member 尾鍋一郎 OB(CL) 林三郎(SL) 森本幹雄 角倉光彦 大浦範行

日程 6月3日～12日

初めて東大谷にベースキャンプを張る。

9日(快晴)尾鍋、林、角倉、大浦は上部に向かってパトロール中、中俣・中の右俣出合と中の右俣・中の左俣出合の中間あたりでテルモスの上部を発見する。その後、中の右俣をつめ、武蔵のコルを経て前劔南肩に到着後、黒百合のコルより右股を下る。

雪渓には落石の溝ができ、雪は不安定で危険な状態の中、翌日(晴)には、前劔沢の出合に達し、遭難発生時に捜索のためフィックスしたザイルが切れ落ちたものを拾う。

#### 4. 第5次捜索隊報告

Member 先発隊 尾鍋一郎 OB(CL) 松村一郎(SL) 角倉光彦 横林康之 大浦範行 芝山長兄

後発隊 藤田武 OB 稲富洋 高田直樹 芝山次兄 鎌田克則(芝山友人) 武居三郎  
OB

日程 先発隊 7月18日～30日

後発隊 7月26日～30日

遺体は発見され、現場で茶毘に付された。この第5次が最後の捜索活動となった。

7月18日、先発隊6名が出発した。前回の捜索活動の状況から今回は発見できるのではないかと予想された。先発隊は、まづ立山川の偵察を行い、かなり危険な状態ではあるが、下降は可能との判断し、数回のデポボッカの後、7月24日東大谷出合にB.C.を建設した。

先発隊が、捜索活動を行っていた頃の7月26日、京都の遭難対策本部へ警察から「遺体発見」との報がもたらされた。京都では、捜索隊からは何の連絡も受けておらず、京都残留の部員とOBは判断に苦しんだが、とにかく現地に向かうこととし、後発隊が組織され、同日20:58発の列車で富山に向かった後でわかった遺体発見の状況は、次のようなものであった。

発見者は、福岡大学の高木氏ら2名である。高木氏らは、この冬のアタックの偵察のため、7月25日、中の左俣を下ったところ、東大谷二股より中の右俣約20m上方で、遭難者の遺体を発見。身長165㎝位、国防色上着、オーバースボン、オーバーシューズ、アイゼンを着用。遺体の約2m上方にあったゴーグル、ミトン、毛糸手袋の三点を持ち帰った。

ベースキャンプにいた先発隊は、このことをまったく知らなかった。

7月27日19:05、後発隊の稲富、高田は東大谷出合の捜索隊BCに至り、遺体発見を告げる。

7月28日、尾鍋、角倉は遺体確認のため、7:00BCを出発、この時まで不明確だった遺体の位置を明確に確認した。12:00BC帰着。直ちに撤収にかかり、14:30、尾鍋、稲富、高田、角倉、大浦の5名は、雷鳥小屋に向かった。雷鳥小屋着19:15。松村、横林、芝山長兄はBCに留まった。以後の行動について相談した結果、昨日の尾鍋、角倉の下降通過直後、ナメ滝のスノーブリッジの崩落を確認したので、下から現場に至るのは不可能と考えられ、BCを撤収し、剣沢小屋に移ることとなった。

29日と30日の両日をかけて、フィックスザイルの回収を含むBC撤収作業が完了した。

7月31日、全員は10:30雷鳥小屋を出発し、剣沢に向かい、BCを設営。武居、稲富、角倉、横林、大浦は12:30帰洛のため下山。尾鍋、芝山長兄は前剣まで往復する。

8月1日(快晴)茶毘のため現場に向かう日である。

尾鍋、藤田、松村、高田、芦峠ガイドで剣沢小屋主の佐伯文蔵、芦峠ガイド佐伯栄治、佐伯亀吉及び警察官の8名は、6:30小屋を出発して剣岳一般登山路より前剣沢のつめに至る。

警察官は、検死するためには現場に行かないといけないと張り切っていたが、つめから前剣の降り口を見下ろすと、「おっとろし。こんなところはくだれんちゃあ」と下りをあきらめた。

尾鍋、高田は、走り下る文蔵さんと栄治の後を追いつき、8:00、現場に到着。

雪溪上の岳樺の薪を拾い集め、雪溪端のガレ場の傾斜地に積み上げて焼き場を作る。8:25点火。骨を拾って11:00現場を離れる。BCには、14:30帰着した。

8月2日(晴)全員帰洛のため下山。8月3日、遺族、関係各位の多数の出迎えを受けて、7:30京都着。直ちに遺骨とともに芝山宅に向かう。

(竹村義弘先輩より、この記事に関して、あまりに客観的記述に過ぎるのではないかいま少し感情移入があってもいいのではないかと指摘をいただいた。しかしながら、遭難報告に感情移入などはあってはいけないと考える。この遭難については、いろいろなところで文章にしているし、当記念誌にも「回想の東大谷」を引用掲載している)